参考資料4

「子どもたちへのアンケート」実施に向けた峰山高校生とのワークショップ
～回答まとめ～

◎実施 … 令和5年7月13日（木） 13:30～14:10　於:峰山高校
◎設定テーマ
「京丹後市長として、子どもたちが主役の学校をつくるなら、どのような学校をつくりたいか。」

Ａグループ（1年生3名）

・ジェンダーの問題を意識した学校
→小中学校の時、ペアを作ってという指示があった時、男子と女子といった性別で分けられることもあったが、それが嫌だった人もいると思う。
→女子は更衣室があったが、男子にはなく、教室などで着替えていた。
→先生が指名する時、元気の良さそうな男子という理由で指名されていたが、平等ではなかった。高校では、番号順とか誕生日など、指名される時は公平である。

・夢を見つけたり、進路のイメージをもったりするなど、視野を広げる学校
→小中学校は義務教育であったが、高校で初めて自分の意思で進路を選択するという経験をした。何のためにどこに進むかなど、不安だった。だから、大人の話をもっと聞ける機会を増やしてほしい。専門の人たちの話を聞かせてほしい。そうすれば様々なことが学べたり、夢を持てたりすると思う。
→ボランティア活動もあったが、自分で選んで実際に体験したい。それがきっかけに夢をもつきっかけになると思う。中学校の時は、コロナで機会がなかったが、後輩が学校周りの清掃活動をしていた。選択したわけでなく、決まっていた。様々な体験を実際に行うことは難しくても、VRなどを使って、実際に体験するような疑似体験ができるし、そうすれば内容もしっかりわかる。
→高齢化等で問題がたくさんあるが、様々なかかわりをすることで、地域が活気づく、大人になって戻ってくるようになるのではないか。地域にも世界にも視野を広げていきたい。

・情報化社会で使えるスキルを身に付けられる学校
→使い方をもっと教えてほしいし、学校ではその支援をしてほしい。学校で使い方を学ぶことで、今SNSなどをたくさん使っている子どもたちは、その中でどうしたらよいのか、悪いのかといった判断ができるようになると思う。

・ディスカッションで他の様々な視点を広げていく学校
→小学校や中学校も話し合う活動はあったが、教科書にあることを話すだけやありきたりの授業であった。今、高校では、「いさなご探究」というディスカッションで話を掘り下げていくような授業がある。自分の考えになかったことや性格の違う人の話を取り入れて

いくことがおもしろい。自分の主張ができ、コミュニケーション能力がつく。小学校や中学校で体験は様々にあったが、「何のためにやっているか」をはっきりした活動であれば、ペットボトルのキャップや缶のプルタブ集めたり、古着を送ったりすることに意味が出てくる。すくなくとも、小学校中学校で取り組んだことが今でも記憶に残っているので、そこに「何のために」を意識すればよい。

・SDGsのテーマを取り込んだ活動のできる学校
→内容は、上記にあるようなものと同様でした。

★結論、自由度のある中で、自分で選択ができ、自分たちで学びを深め、夢の実現に向けて視野を国内にとどまらず世界までも広げることのできる学びを求めている。

Bグループ（2年生3名）

・英語教育に力を
→中学校の英語は文法とワーク中心。宿題もあり、勉強したらよいところもわかった。高校ではオールイングリッシュ。ワーク等もなく、何をどう勉強すればよいかわからなくて苦労している。中学校から英語教育に力を入れるべき。

・探究活動に力を
→高校では探究活動をしており、自分のテーマに沿い、丹後に関することについて調べている。とても面白い。地域の人から得る情報や交流、Roots に行けば何かアドバイスをもらえる。中学校でも総合的な学習の時間はあったが、もっと探究に力を入れるべき。

・道徳のやり方を変える
→中学校の道徳は教科書を読んで、それに対して心情を理解したり、思いを発表したりだった。ある程度賢い生徒なら、「こう答えておけばよいかな」という正解の回答がわかり、自分を本気で出せていない。こう変えたらよいという具体的な策はないが、道徳の授業を変えていくべき。

・主体的に学習するための仕掛けを
→やらされている学習だけでは通用しない。主体的に学習する習慣や態度を身につけないといけない。
→例えば中学校にも自習室を設け、時間の自由度をもっと広げ、自ら学習する環境を作るなど。

・異年齢・地域の人との交流を
→中学校、高校は行事や部活動を除いて同じ学年の人しか交流がない。社会出て通用する

基本的なマナーや礼儀、コミュニケーションなど、先輩方から学ぶ部分も多いだろう。もっと異年齢で学習したり交流したりする機会をたくさん作るべき。

→同じく地域の人と交流し学習する場面も必要。地域に外国の方もたくさん住んでいる。英語学習という面からも大きな成果があるのでは。もっと地域に出て学ぶ時間がたくさんあったらよい。

・少人数の学校ではなく、ある程度大きな学校を

→丹後は少人数の学校が多い。少ない人数の良さもあるが、人間関係も固定化される。たくさんの人がいて、いろいろなキャラクターが認められ、競争も激しい、都会の子に対抗していくためには大きな学校が必要。

・中高合同の活動を

→高校は時間的にもきまり的にも自由度があり、学校祭の取組を自由に自分たちで考え自分たちで作り上げることができる。(クラスの T シャツをデザインしたり、イベントを行ったり)、また、「丹後万博」のようなイベントなども学校を超えて開催することもできる。中学生と高校生が一緒になって行う活動があったらよい。

・中学校は時間的余裕がない。時間に自由度を

→スクールバスの関係もあり、中学校は「登校→授業→部活→下校」と昼休みも短時間で時間的な余裕がない。いろいろなことをしたくてもできない環境。そこを改善し、時間的な自由度を確保できる学校を。

・その他、行事を楽しく、制服をかわいく、校則を緩くなど。

C グループ(2年生2名)

・自分たちだけで話し合う学習活動を充実させる。

→ 先生が一方的に話す「聞くばかり」「input 中心」の授業は退屈だし、ニーズに合っていない(自分が分かっていることの説明に長い時間が使われることがある)から。

→ 「いさなご探究」は、自分たちがしたいことができる学習、自分たちで話し合ったり、発表したりする output の機会もあって、自分を出せる学習なので、増えるとよい。

・外部人材を充実させる。

→「ルーツ」の人たちのような「学び」をサポートしてくれる人がたくさんいると、「いさなご探究」のような学習の時に相談もしやすいし、必要な時に校外にもどんどん出て学ぶことができるようになる。(先生だけだと、付いてくれる人の数が少なくて、校外に出にくい)

・「よりよい学校」の大事なポイントは、「集団の雰囲気・人間関係」。

→自分の発言を受け止めてもらえるとうれしいし、違う考えであっても出し合える・互いを

尊重し合える集団は、よい「学び」をしていくためにも大切だと思う。
→「自分たちだけで話し合う学習活動」を続けていくことで、「集団の雰囲気・人間関係」も高まっていくと思う。

・「いろいろな人とのつながり」を、どんどん広げていける学校だとよい。
→例えば、「いさなご探究」のような学習で、テーマ別グループを組む時、学年の枠を越えて組んだりできるとよい。また、ICT を活用して海外の人と研究テーマについての情報を交換したり、一緒に研究したりできるとよい。
→授業以外の時間に、異学年の人と一緒に遊んだり、同じ“興味あること”に取り組んだりできる場・時間があるとよい。

・「ICT」は、学習がしやすくなるし、そのスキルは社会に出た時も役立つので、どんどん取り入れていきたい。
→今は、ノートとして使っているが、教科書もデータでもらえるとよい。（紙を減らす）
※でも、「筆記具を使って手で文字を書く」ということにも大切な部分はあるから、そうした活動は、「効率」とは別の部分で取り組んでいくことが必要。
→今は、検索やZoomでのインタビュー（コロナでゲストティーチャーを招けない期間等）にも使っているが、発表に使える機能が進化していくとうれしい。（目の前の空間に立体画像が浮かび、回転させたり、拡大したりできるとか）
→数学の立体図形の学習等では、具体物や ICT をたっぷり使えるようにして、自分で操作したり、考えたりしながら学習できるようにしたい。
→教室環境として、充電しやすい状態をつくる。（机に「置き型」の充電器が埋め込まれているとか）
→個別にタブレットだけでなく、全体共有の部分も黒板からスクリーンやモニターになっていくと思うから、そのサイズは大きくした方がよい。（黒板サイズのモニターとサブのホワイトボードなど。今と逆）

D グループ（3年生3名）

・ICT で学習の効果を上げる
→タブレットを使うことで、効率が良くなるし、学習内容に関する情報を一元化したり、振り返りに活用したりできる。
→より効果的に使っていくことができるよう、ICT の様々な使い方や原理、システムなどを学べる授業があるとよい。
→中学校の数学科では、ワークブックを使っていたが、それだと全員が同じ難易度の同じ問題にしか取り組むことができない。それぞれが自分の学習状況やペースに合った学習ができるよう、教材を選択できるようにしたり、タブレットでレベル別の問題に取り組めるようにしたりできるとよい。

・成長につながる様々な経験を積める学校・社会をつくる

→ここだからできることもあるが、都市部と比べて、経験できることの種類と量に差がある。例えば、予備校などの学習環境、文化的環境、外国の人と触れ合う機会、スポーツをする施設的な環境など。外国の人とコミュニケーションをとることへのハードルの高低には、性格的な面も影響するだろうが、日常的に接する場や機会があったり、留学（行く方も・受け入れる方も）が特別なことでなくなったり、進化した翻訳ツールを効果的に使ったりすると、「場数を踏む・慣れる」ことからハードルが下がる（積極的になれる）だろう。

→様々な経験を積むか・積まないかを決めるのは「自分」だが、失敗を恐れなくてもよい環境やチャレンジできる環境があったり、勇気を出せるよう支えてくれる先生や小さな成功体験を積み上げさせてくれる先生がいたりする学校なら、みんなが自分から様々な経験を積み、成長していくことができるだろう。

→また、そうした経験は、「子どもたちに委ねられた範囲」が大きい方がいい。
例えば、学校行事の計画や運営の中心を子どもたちが担うようにすれば、内容のこと・予算のこと等を考え、実行していくことが必要になり、そのことは将来の「仕事」につながるより大きな経験となる。（他の例としては、校則）

・これから必要だと思う力

→「本質を見抜き、確かな根拠をもって判断する力」、「主体性」、「メディア・リテラシー」、「リーダー性」

→「リーダー性」をもった人が増えると、それは集団や組織を強くすることにもなる。
ただ、すべての人がそれを目指す必要もなく、大切なのは、それぞれが自分の力や長所を知り、自分に合った場や役割で力を発揮していくこと。互いに発揮できるようにしていくこと。

→「時代の変化に合わせて、教育を変える」時、増やすばかりではなく、減らすものとセットで考えることが必要。
例えば、情報や英語、理数科目などは誰にとっても重要だろうが、国語の古典などはみんなに必要とは言えないかもしれない。必須の学びと教養としての学びの整理があればよい。

・増やしたい授業は、「みんなが自然に、積極的に話すことができる授業」。

→学年が上がっていくと、自ら発表する人は減っていくことも多いが、みんなでわいわい話せる授業は楽しいし、自分が話したこと（自分の意見であったり、学習内容の説明であったり）は、その後も自分の中に残る。

→性格的なことも超えて、どの人もが「自ら話そう」と思える雰囲気がある学校がいい。